

研究種目： 基盤研究 (A)

研究期間： 2007~2010

課題番号： 19202001

研究課題名 (和文)

ドイツ応用倫理学の総合的研究—「人間の尊厳」概念の明確化を目指して—

研究課題名 (英文)

General research on German applied ethics for clarification of the concept of human dignity

研究代表者

加藤泰史 (KATO YASUSHI)

南山大学・外国語学部・教授

研究者番号： 90183780

研究代表者の専門分野： 人文学

科研費の分科・細目： 哲学・倫理学

キーワード： (1) 尊厳概念の比較考量可能性 (2) 尊厳概念の文化多様性と普遍性 (3) 最貧者の尊厳とベーシック・インカム (4) 倫理学と経済学の結節点としての CSR (5) 生物多様性と自然の代替可能性 (6) 内在的価値としての人間-自然関係 (7) ケアと正義の統合可能性 (8) 二重アスペクト理論と統合的自然主義

1. 研究計画の概要

(1) 本研究は、ドイツにおける応用倫理学の各分野 (生命・環境倫理学、ケア倫理学・ビジネス・エシックス、グローバルエシックス) の議論の動向を分析し、主要な論点を析出して、ドイツ応用倫理学の全体像を説明することを目的とする。

(2) そのさい特に「人間の尊厳」概念に焦点を当て、それが各分野の議論で担っている役割と重層の関係を説明することが研究の中心を形づくる。

(3) 析出された論点に関しては、ドイツ人研究者との直接討論の中で、またドイツの議論と英米圏の議論との比較検討を通して、その意義を確認しつつ、日本での応用倫理学の議論にフィードバックして一定の理論的貢献を図るとともに、最終的には人間の尊厳概念のグローバル・スタンダードを日本から発信するための視座を構築することを目指す。

2. 研究の進捗状況

(1) 生命倫理学に関しては、「強い意味と弱い意味における人間の尊厳の区別」と、それを支える人間理解として「自由で依存的な存在者」という概念が、とくに文化多様性および比較文化的観点からも重要であることが

認識された。また、日本における「尊厳」の概念史研究がまだほとんど手つかずであることが明らかとなったので、それに取り組みと同時にその成果の一端を 2010 年 7 月 16・17 日にドイツ・ビーレフェルト大学で開催される国際会議で発表することになった。

(2) ビジネス・エシックスに関しては、CSR 概念が倫理学と経済学との結節点であることが説明され、日本およびドイツにおける CSR 理解の現状について分析が進んだ。とくに尊厳を重視して、企業が道徳的主体であることがいかにして可能かという問題意識から、利潤と道徳をめぐるパラダイム転換の可能性を模索し、その橋頭堡として国連グローバル・コンパクトやベーシック・インカムなどの重要性を説明した。

(3) ケア倫理学に関しては、ギリガン、ノディングス、ヘルトラの議論を再検討することを通して、正義または自律とケアとを対立的に位置づけるのではなく、両者を統合的に理解することの重要性が認識され、いかにしてそれが可能であるのかを説明した。

(4) 脳神経倫理学に関しては、二重アスペクト理論の現代的意義が認識され、なかでも「統合的自然主義」の立場に、「尊厳」に関

連して生産的な議論を開く可能性があることが確認された。

(5) 環境倫理学に関しては、「内在的価値としての人間-自然関係」や「統合的自然主義」という考え方が、生物多様性という観点からもきわめて重要であることが解明され、「人間中心主義 対 自然中心主義」という従来の図式を克服する可能性が確認された。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

(1) (グローバルエシックス以外の) 応用倫理学の各分野について、これまで日本で議論されてこなかった「統合的自然主義」などの新たな論点を析出し、その一端を中間報告書としてまとめたこと。

(2) ドイツの世界的な研究者を招いて国際シンポジウムを継続的に開催し、分担者・協力者を交えて積極的な意見交流ができていくこと。

(3) ドイツの研究グループとの緊密な協力体制の下、本年3月にはデュッセルドルフ大学にて合同シンポジウムを実現したことである(なおその成果は論文集としてドイツでの刊行を企画中である)。

4. 今後の研究の推進方策

最終年度は、ビジネス・エシックスと脳神経倫理学に関するワークショップを継続的に開催するとともに、新たにグローバルエシックスに関するシンポジウムを開催する。そこで人間の尊厳という論点をさらに豊かにした上で、「尊厳と価値」と題する包括的なシンポジウムを行い、応用倫理学における「人間の尊厳」概念の意義を総括する。来年3月には再びドイツにて生命倫理学の合同シンポジウムを企画している。研究成果はすべて報告書および論文集として刊行する予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 33 件)

- ① 加藤泰史、「現代社会における「尊厳の毀損」としての貧困——格差・平等・国家へのカント的アプローチ——」、日本哲学会編『哲学』、第60号、pp. 9-31、2009年、査読無。
- ② 高田純、「カント実践哲学の生命倫理的射程(上)」、札幌大学外国語学部紀要「文化と言語」、71、pp. 125-163、2009年、査読有。

- ③ 舟場保之、「ジェンダーは哲学の問題とはなりえないのか」、日本哲学会編『哲学』、第58号、pp. 61-78、2007年、査読無。

[学会発表] (計 33 件)

- ① 松井佳子、「Reconceptualizing Autonomy / Care and Public/Private — Can the Ethics of Care Become a Global Ethics? —」、Tagung Feministische Ethik mit dem Schwerpunkt: das Konzept Menschenwürde oder Zwischen Sorge und Autonomie、2009年9月2日、南山大学名古屋キャンパス(名古屋)。
- ② 宮島光志、「生命倫理教育の基本ツールとしてのWMA 医の倫理マニュアル」、日本生命倫理学会第20回年次大会、2008年11月30日、九州大学。

[図書] (計 11 件)

- ① 松田純ほか 12 名、南雲堂、『薬剤師のモラルディレンマ』、2010年、220頁。
- ② 入江幸男、加藤泰史、他、ミネルヴァ書房、『グローバルエシックス』、2009年、(入江:151-176頁、加藤:65-92頁)。